

邴
一
葉
集

後
編

911.308

八

後編 1

芭蕉翁卷句附合久華益讀佛出遺法消
息也一代之風藻雖不可忘于茲所謂親親
於古書收藏於他庫者悉以舉焉

俳諧一葉集

前後篇九冊

東都中橋北植甲

一具菴藏梓

序

俳諧者非常色而中格妙門也
世人妄謂一時戲言綺語也豈
支然耶蓋能致知而達理之常
變氣之順逆固守自得遊心於
太虛別語默作之無有不善故

棄名利而造之靜安可獲焉誠
意而為之身脩家整舉不外乎
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風
靡今雖其流間有渚者沂源者
亦不少也屬者社友集錄翁一
期所嘯以為小冊以便卷懷可

緱夜行珠矣傳曰法不自顯弘
之在人湖子其人乎是為序
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼苔菊

林中之谷神齋二回蘭

天為平... 四民... 秋... 入... 賦... 志... 入... 志... 其... 改... 水...
 同... 林... 樹... 志... 對... 白... 兩... 深... 自... 歸... 此...

俳諧一葉集紀行之部

古學庵佛号
 幻窓 湖中 編
 坎富 久藏 校

甲子紀行 又稱野 曝紀行

本屋より松立し沼野を色は三更月二舟白入と云ひけん
 むりしの人の杖うさううと貞亨甲子秋八月江戸の破屋を
 立の屋と風のちりそとるまじけり

秋十とを印して江戸をさす古
 屏ら〜〜〜の両側を山とれや〜〜〜か〜〜〜

東方の白不... ぬりて... けり

何れも里... 心... 友人... 此人

源川や... 千里

不道川の... やらるる... 秋の風

わらわ... 父の... 性此

は... な

大舟川を... けこ

秋の... 千里

三上の吟

是の... 吟

廿二... 秋... 中山

丁... 松

松... 十八の... 吟

余傳年巧のしとては世をたふしの八原の属したる
神奈川入るるをゆきさす事しおちるう海傳りしとて一
多居のうけけのうくゆかたをく又てかかすれ
峰の松風をうきむるうゆかたをかきし

三十一の月かきしむるうゆかたをかきし

あひのちの松をうきむるうゆかたをかきし

廿二の月かきしむるうゆかたをかきし

女ありあのうきむるうゆかたをかきし
子若くあはれむるうゆかたをかきし

二十の月かきしむるうゆかたをかきし

商人のきかたをかきし

廿三の月かきしむるうゆかたをかきし

長力のかきむるうゆかたをかきし
不好し何事かきむるうゆかたをかきし
まゝに命をうきむるうゆかたをかきし
まゝに女の白髪をかきむるうゆかたをかきし
まゝにうきむるうゆかたをかきし

二十の月かきしむるうゆかたをかきし

大和のうきむるうゆかたをかきし
お里のうきむるうゆかたをかきし

二十の月かきしむるうゆかたをかきし

二上山のうきむるうゆかたをかきし
海のうきむるうゆかたをかきし
も佛縁のうきむるうゆかたをかきし

三十一
信ありて不いく我よりは法の松
ひまらき芳地の木くさかきくはるるやうに山深く白を
かきよすう松南舎とて地す山嶽の松葉ししうらひさく西
ふ木も伐り葉もひき隠すの道の新うらひなげすこもひ
昔より山より入るまことこをれり人のみはくは訪るの
あきらかきういし和らねるる山といはんまことむかひ
ひまらき松とてかきく
諸おろるるやうにや坊り島
西上人の字の法は法を木くの院より右の方二丁をうさけ
入りに里人のかきよすのまことこをれりてさきき谷は福
ふらひまらきかきくの法は法を木くの院より右の方二丁をうさけ

くさくさくさくさくさく

おろるるやうにや坊り島

おろるるやうにや坊り島
おろるるやうにや坊り島
おろるるやうにや坊り島
おろるるやうにや坊り島

おろるるやうにや坊り島

おろるるやうにや坊り島
おろるるやうにや坊り島
おろるるやうにや坊り島
おろるるやうにや坊り島

おろるるやうにや坊り島

不破

おろるるやうにや坊り島

大垣より函へて秋の本因とあるをまよひてむしり遊をたつ
時時ふらふを心や思ひて松をけられ

秋やきぬ松ののこしよ秋のとれ
葉名布富ちよし

その秋より宿傳をまよひてま中よ宿の方を出て
ゆけはゆめやきし奥もふるり一寸

秋月より宿の秋段大に破れ宿傳はかかれて学む
かくるりこを張と張と小社の伝をききしに石をま
てを律と名の宿傳のふ心のすまはまらうまのり
めし夜もくも心ゆり

まのふきく松を餅まやとらうれ

名護屋より入るの秋と紙は

粗白右より一尺の竹を似たる松

ちと尺よりゆきし
市人よこの冬をききし
旅人よ尺を

ちと尺よりゆきし
海もこころをききし

海もこころをききし
海もこころをききし

ちと尺よりゆきし
ちと尺よりゆきし
ちと尺よりゆきし

ちと尺よりゆきし
ちと尺よりゆきし

と山あふ年をくらし

清 舞 了 留 余 餅 村 女 田 子

（素直に）わがそふは

まふれやふれふふ山の節のうら

二月来りて花

水取や水の花は昔のやと

高きうら三井秋風は写流の山をを訪

梅林

くた白きまふや朝もぬきをれし

檀の木の花はかたしぬすこしぬ

伏見西岸古任はよ人の色

余 衣 子 伏見の木の末をよ

大はくもそ山をくらし

山 谷 草 々 何 や 何 う す け 草

池 水 院 堂

かきさねの杉をむすし結りて

倉の底にひきぬ松皮を海をくけ

けししけくそけし干籠さく女

吟行

業とくけし花見うらむすあふ

水はく世帯を種し古く千色

命 あふのの中は 活くは 極のれ

伊豆不城の山鳥の素門にれは古の秋すけし折

余ををゆきそ秋のそつとと尾張不すし結

と山あふ年をくぐり
流聲了る岩のそと餅たふ玉のこ
なまらふやうにそめは

二月来りて花く

水取や氷の伝は雪のわで
高きより三井秋風は写院の山を訪

梅林

くた白きまのふや雪をぬきまれし
櫃の木の花はかたがたぬすこころれ
伏見西岸古任はよ人の趣く
糸衣より伏見の木の末きよ

大徳寺の山をくぐり

山は青き向やうのうすられそ

池の御堂

かきさねの杉をむすり終りて
倉の原よりひとも林原をへけり

けしきけりてそめは干籠さく女

吟行

業くくけりて花見うらむすめは

水はく世帯を流し古人平色

命あふみの中を流しはる梅のれ

伊豆平城の小島の若門はれは古寺の秋すけり
新しき
春のそめはつとむと尾張不き法を

心未くうけられ

いそぐとてし種をうくく人々を扶

以他をききて言ふ覺寺の大願を為すむ月のけ

化にふりしきと也宮の心也とくすにまひる

世角子一アツのり

極多く卯の心もいふをうくく

好杜玉

白けしと卯とく控れか

二く山桐葉子の物きゆくくを身あふりん

牡丹葉涼くくけの増はる

甲斐の山中と云ふ

ゆく物にまふくきい

卯月の素庵より物ゆきの若しとてふけ

いさくくみ

康平日記

後の真室御所の御入子御ふく

松平や力な三三取中御を

とをけん程丈のさしりあつていきさつは秋かゝるの心
月見んと思ひまじりけり人々の信意の士は一人
あやう傳ふかゝすのさしりあつて信意の士は一人
りあけ出心由る信と厨子りぬえ入りてりあつて
松林御あつて一門の算もさつりぬえりあつて
御あつてぬえりあつて信意の士は一人
けりあつてぬえりあつて信意の士は一人
舟りあつてぬえりあつて信意の士は一人
御酒のらつてぬえりあつて信意の士は一人

或人のさしりあつて信意の士は一人
さしりあつて信意の士は一人
野りあつて信意の士は一人
山むりあつて信意の士は一人
あつて信意の士は一人

おのれは手あつて信意の士は一人

と後一八寺門人信意の士は一人
信意の士は一人
あつて信意の士は一人
お入りぬえりあつて信意の士は一人
中即あつて信意の士は一人

康島紀行

佐の奥室は廣の海に面したゆへに

松ヶ丘や月石を三石坂井 納を

と云けん程丈のむらゝのまのりきまへに秋かゝるの日の
月見人も思ひきこめり竹中人やう信家のさびしう一人
あやむの情こゝかしすのこゝろのまのりきまへに秋かゝるの日の
りあへけお心のなつて厨子やゆへえ入るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
秋枝のあゝゝゝ門の扉もきつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
鴉あゝゝゝぬゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
時可有居をかゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
舟やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
河原のらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

或人のえいさゝゝゝゝの木もしけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
野りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
山むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おまゝのつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

と流しハ赤門人を見せり向ありすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
はをけゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
お入るゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
中郎宗かゝるや度赤みゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

2. The first of these is the fact that the
 3. ... of the ... of the ...
 4. ... of the ... of the ...
 5. ... of the ... of the ...
 6. ... of the ... of the ...
 7. ... of the ... of the ...
 8. ... of the ... of the ...
 9. ... of the ... of the ...
 10. ... of the ... of the ...
 11. ... of the ... of the ...
 12. ... of the ... of the ...

The first of these is the fact that the
 ... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...

和尙

... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...

... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...

神秀

... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...
 ... of the ... of the ...

ゆくとくや石のおやの昔のな
縁おやがこまのゆくまのそ

宗波
曾良

田家

かろけけ田圃の勢や里の秋
程田うけに系やせぬん里れ有
船の子や稿すうけく月をこら
芽の茎や力たの里れ焼をけ

枕青
宗波
枕青

野

もひをや一花すうけ萩ころも
却の秋をうけぬゆくとく
萩多や一花ハやとさ山の
菊は自準とたす

曾良
枕青

樹をよまう千石の友す
秋をよめうけくゆのき
菊は自準とたす

松江
枕青
曾良

貞享丁卯仲秋末五日

卯辰紀行 又稱芳 野紀行

百揆九竅の中子物ありか子名付く風心野坊と云珠子
くすもの、風子破とやするらんていさきやゆらんかれ粗
むを尋むて久しげ子生健のそつていさきやゆらんかれ粗
健く放擲きんていさきひゆめすんて人かからんを
なくす是非拍子にけりあつていさきやゆらんかれ粗
あつていさきひゆめすんて人かからんを
そく更そいさきいさき事を思ひていさきやゆらんかれ粗
す能き事思ひていさき一筋にけりあつていさきやゆらんかれ粗
室後のまじりあつていさき摩舟の繪にけりあつていさきやゆらんかれ粗
千歳をすするものハ一より三つていさきやゆらんかれ粗

くは財を友とす尺くは花子ゆめひとさきとけりおま
あつていさきひゆめすんて人かからんを
ひく心花子ゆめひとさきとけりおま
さきやゆらんかれ粗
和骨月の初定さつていさきやゆらんかれ粗
地一々

旅人ともこの名よくれん初一くれ
すこ山登すを如くす一々

岩株の位長友郎と云ふあつていさきやゆらんかれ粗
岸邊送りきんと云ふあつていさきやゆらんかれ粗

みん秋より時をこめん旅の法と

あつていさきひゆめすんて人かからんを

とくして四友親疎門人ハありハ付テ文章をもとめて詩の成を
 字體の料をも包く志と尺寸の二月の標をも砂のむらり
 一芥の力も入る哉衣襟子をもくすの帽子志くして流す此
 物心々に結つ一つはくもあやうき者といふや心外
 或ハ小舟をもくく之お妙に没し字流し海者にんき果て
 ゆく唇を祝くあ跡を悟り外にすうアマノ所め一人ハ
 是途すうすうと似たりと心と抱めうく受ふまけれ
 そもしてそのり紙もこのの紀也長ぬ所佛の尼の文をさ
 以情を盡くすうの解ハこれ件似うして其贈物を取
 らうとわうとあうまうすうの満會短才の子子及まうと
 心ハをりを向海屋ううそれこそとて相りか
 物とを川あられうれをえてもわれくもまう受付れども

其志之密新のまういひうくハまうとあうれまうとまうと
 於風京心平流り山嶺を平の岸くま結も且つ詩の時
 多う風和のぼりうも思ひあうとまうおぬをくはわ
 矢やまま真あけうう於破つもの伴付すひまうくいわ
 人の誰きすうまうの尺命う人かまて物まよ

鳥海子とわうと

四時時めやうとて欠くわわ

飛鳥丹雅草云の時言うとまうとまうとまうとまうと
 みうとまうとけき海を中うたうとまうとまうとまうと
 きうとまうとかまうとひけうとけうとまうとまうと

京中しハまうとまうとわわ

みうけのふ保まうとまうと杜まうと忍ひまうとまうとまうと

たてはしるなふさはしきつらうな護屋をむく田里に入ると
旅ねす尺一や浮草の娘とくくい

葉たれうぐいす木めれなもさう水の里うろろくく杖はな
坂のたしはな新編おとくうろくくさうな

かちかちの杜のき坂をさうさうのま
と物うさめ飾うさめ侍れとれ跡に幸の洞入り

古さくや箱の跡うはくくくく
方の手ちの足跡をいかんといぬ飲板あうりおえの箱をさ

行ふれハ
二のうらと物うらくくくくくく花のま

幼妻
ままうらくくくくくくくくくくくく

枯草や海に流るは一二寸

浮草をゆづるはとさす信宗上人の田治り護峰山新六
佛寺とくくくくくくくくくくくくくくくくく

く礎を築かたをたぬく回細くまのかをくくくくくく
苔のみくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
跡うくくくくくくくくくくくくくくくくく

のせれくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

文ありくくくくくくくくくくくくくくくくく
旅主輝吟云のたうし

きんくくくくくくくくくくくくくくくくく
きんくくくくくくくくくくくく

伊勢山田

伊勢木の花をよみしるは

裸のハサコをよみしるは

菩提山

伊山は山にさきよ此を心なり

飛尚舎

物の心をまじりては

彌代氏教を奉り會

梅の木をよみしるは

學虎舎

芋植る門を

神垣のくらし梅一本をよみしるは

目好くす為侍れは只何とぞ

おもしろき花をよみしるは

神垣や梅の心

やよひの心は

いく枝の心と

ゆく古崎の心

旅人の心

旅人の心

旅人の心

旅人の心

乾坤無位同行二人

伊勢山田

何れ木の花とてさしづらむらひの

裸よりハまきまきとてはむらむら

菩提止

け山は止しききよとてむらむら

龍尚舎

物のまきをまきとてはむらむら

彌代民部を事する會

梅の木をまきとてはむらむら

早虎舎

芋植する門を事する會

神垣のしら梅一本とてはむらむら

目好。予は伊れは只何とてはむらむら
多良の館のしら梅一本とてはむらむら

おのゝらむらむらむらむらむら

神垣やむらむらむらむらむら

やまのむらむらむらむらむらむら

ひく枝好とて束さる芳種の先をむらむら

ひく古崎とて束さる置一人の伊勢とて

旅好のゆきれをも見且ハまきとて

旅好のゆきれをも見且ハまきとて

旅好のゆきれをも見且ハまきとて

旅好のゆきれをも見且ハまきとて

乾坤無位同行二人

すくすく様尺さくは柱木

すくすく香も尺さくは柱木 一万丸

旅の具わたりはささくすくすく物入れくひはくすく

すくすく物入れくひはくすく物入れくひはくすく

すくすく物入れくひはくすく物入れくひはくすく

すくすく物入れくひはくすく物入れくひはくすく

すくすく物入れくひはくすく物入れくひはくすく

すくすく物入れくひはくすく物入れくひはくすく

葛珠山

程尺さくはくすく物入れくひはくすく

三幅角武峰 橋味 武峰下り

やうたうたさくすくやすくすく

龍門

龍門の巻や上戸はくすく

龍門の巻や上戸はくすく

西河

西河の巻や上戸はくすく

諸峠の巻 布留の巻 布留の巻 二十五丁山の巻

布留の巻 不幾田の川上り 大和巽西勝尾

寺くすくはくすく

様

さくすく物入れくひはくすく物入れくひはくすく

早稲花より香るるさびしきやゆきゆきと
扇しは風をふくやけや友休くら

昔情水

まきの木に身をまきまきとてわらわ
ふりやうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
まきの木のやうなやうなまきまきとてわらわ
振返るの涙をよそへて西りの枝のよすよすの
これに打ちまきまきとてさうとてさうとてさうとて
もさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

予卯

父母はまきまきとてさうとてさうとてさうとて

和歌

りまきまきとてさうとてさうとてさうとて

紀三抄

晚ハやみれりありありとてさうとてさうとてさうとて
かみれりありありとてさうとてさうとてさうとて
雪化のふりまきまきとてさうとてさうとてさうとて
人の愛まきまきとてさうとてさうとてさうとて
八連年のまきまきとてさうとてさうとてさうとて
海にまきまきとてさうとてさうとてさうとて
さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
まきまきとてさうとてさうとてさうとてさうとて

一、凡欲求道者，必先求其心。心者，道之根也。心正則道正，心邪則道邪。故欲求道者，必先正其心。

夏

二、凡欲求道者，必先求其德。德者，道之華也。德厚則道厚，德薄則道薄。故欲求道者，必先修其德。

三、凡欲求道者，必先求其行。行者，道之實也。行正則道正，行邪則道邪。故欲求道者，必先正其行。

四、凡欲求道者，必先求其志。志者，道之帥也。志堅則道堅，志弱則道弱。故欲求道者，必先立其志。

五、凡欲求道者，必先求其學。學者，道之資也。學深則道深，學淺則道淺。故欲求道者，必先勤其學。

六、凡欲求道者，必先求其思。思者，道之機也。思精則道精，思粗則道粗。故欲求道者，必先精其思。

七、凡欲求道者，必先求其言。言者，道之符也。言正則道正，言邪則道邪。故欲求道者，必先正其言。

八、凡欲求道者，必先求其動。動者，道之機也。動正則道正，動邪則道邪。故欲求道者，必先正其動。

九、凡欲求道者，必先求其靜。靜者，道之機也。靜正則道正，靜邪則道邪。故欲求道者，必先正其靜。

十、凡欲求道者，必先求其和。和者，道之機也。和正則道正，和邪則道邪。故欲求道者，必先正其和。

冬

十一、凡欲求道者，必先求其仁。仁者，道之機也。仁正則道正，仁邪則道邪。故欲求道者，必先正其仁。

十二、凡欲求道者，必先求其義。義者，道之機也。義正則道正，義邪則道邪。故欲求道者，必先正其義。

十三、凡欲求道者，必先求其禮。禮者，道之機也。禮正則道正，禮邪則道邪。故欲求道者，必先正其禮。

十四、凡欲求道者，必先求其智。智者，道之機也。智正則道正，智邪則道邪。故欲求道者，必先正其智。

十五、凡欲求道者，必先求其信。信者，道之機也。信正則道正，信邪則道邪。故欲求道者，必先正其信。

麦の穂をいりてみあひて漁人の狩らまはけの心をは
えしつるいふる

海すのうねまのこゝろわけーのそ

東波ナ西波ナ浪はすを三雲すといれくあふらうの何とて
すゝゝとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
かゝつてすゝのあまいきすこゝも魚をあまーしき初
めよりすゝとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
古戦防の御徳をいひのりかたつてあまもたしけも今ハ
深くも我昔れをいひのりかたつてあまもたしけも今ハ
ひきすゝの子れこゝろいひのりかたつてあまもたしけも今ハ
すゝゝとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ

あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ

次すの海すのうねまのこゝろわけーのそ
対すきまぬくすやあゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
いひのりかたつてあまもたしけも今ハ

のこゝろわけ

皆意やけのあまもたしけも今ハ

かゝつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ
あゝいふとていひのりかたつてあまもたしけも今ハ

つゆの付しむとよふ下よの体と竹と芋と赤心匠の性もこころの
めりぬくつゆ海もよみよとるすよとるす次すのちの海に右
とくくくる呉楚東南のちうえとつゆのちもや物され人の
尺竹くふさしんりのけいひも思ひあそくとくくー又くく
お方の山とつゆの田井の柳とち松竹村雨の古里といふ
尾上つき丹波坂かまふさりつ新市のまきと逆首かかを
るーきくらのとたつ鐘掛松す尺のさう一の谷内裡るーき
用のつや尺海を代のみりれを時のまもふとぬくく心くく
うひ健とけいひつ二位の危君をまもといふたたりやりの
女院の侍堂しゆ足もしれ船長取すまるひ入さふふみ
りくさく内竹局女孀曹子のたふひさんくの侍御はま
あひのひつぎつとぬかね浦あつくとくく船中くまけ

入世ゆはとむれとくくくくの餅とぬく指父目くまふれく海士
世捨てよとあつくと家来のうかひへ浦くくく素波の
まきくさく結わくく竹くか

更科紀行

さうさうの里越峠山の月入る志まうにやうちの秋風。
 心平次さうさうの里越峠の情を狂うもの又いへう越人
 とこの本巻海山流くさうさうの秋風の力もさうさうの
 秋風より奴僕さうさうの秋風の力もさうさうの秋風の
 心も秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の
 心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさう
 さうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋
 風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心も
 さうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさう
 の秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の
 心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさう

三十一

うさうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの
 秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の
 心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさう
 さうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋
 風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心も
 さうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさう
 の秋風の心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の
 心もさうさうの秋風の心もさうさうの秋風の心もさう

同とらぬをいふてしめよふかの言の成旅情の心
 しくこおひすまやと推量し秀をも辱へんこころや時
 おもひのらうゝも地ちののそふ入敷を中敷一坪のやや一
 也ひしひも射候はるる所地ぬきはらんと朱さくゆき
 まわりのうらみさけいひのちさかへる月影の燈の破れす
 本宮からくまき入る引板の言おめあさるまじく
 けるまじくいとき秋のころるるをさるるはては月
 物しと酒さすまらんよとそ持かさうまのつあ一めさの
 大ききこころさあつゝあつゝ前夜をいふおの人ハゆきの
 風情はしるゝいもいひいふさるるゝまじくけの無入
 晴臨玉危の心飲きくゝゝとあつゝゝ

ちか中より新巻きし一言は月

うけいやはのちもくもむきあつ
 かけけいやはのちもくもむきあつ

ちかこれと校八回とあさうたひ 越人

疎野山ハ八幡山に里一甲さう南に五丁横をわ
 すさかしくさくもあふんかとしき思れりて
 只ゆれ山山すさるるなりなくさだにゆいひもんと
 してさうまはるるろ子起きまゝのあつゝのむく人
 旅せんといふは海もさるゝひりれ

伴や疎いしる月め友

更科や三つ月の尺やもれ

ちか中より新巻きし一言は月

あやうきみく大根かきし秋の風
木石の縁なき世の人北ち度うき子
送ふまのわらうけさるゝ木石の秋
善光寺
力新和四門は家も只いゝり
吹飛するるは海百は世さゝり

秋のわらう

月りの首代の過客よりくゆさうふ手と又旅人多く舟の上
生涯をうらうらひのほくくく先とあふふものわり旅より
旅をすくくすとす古人もわらう旅より飛をくくくくくくくくくくくく
手よりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
物よりつてくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
すくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
風くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

夢の戸も候きくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

向ハ方々虎の檻よりけり置やふも事共々るゆゑの志願
 とし一月ハもかたし束しとせられものつ不ニのまかす
 うり尺し上野倉中の花の梢さしつりうらむをいぢり
 すしきかたしハ音よりけりひぢ舟にけりて送るまゝ
 うきうし舟をぬれハあまきまの里の七ハ袖手子さうりつゆめら
 かに静家のほきまゝ

ゆくまやうる節一魚丸用をあらへ

これを矢之井とてとてゆくをけすは人ハを
 中らまふひてけけの尺ゆくやうは尺迄まふと
 一ハ文部二とてや具羽長きゆり御只かくりゆたふ
 立ち異人ハ白髪ゆりみまをまぬりて身もあれた心
 まも同子尺ぬきつひり生々ゆりハさめゆりたのめれ

まよりけきハ御早かきとあすはくまうり夜骨の肩す
 うれつ物先共一むさふすうにくとお之けくも子にちん
 よりのけきゆりてけりまきゆりゆりハまうりこまけり
 志しハまうりすちけりてて海次のけりゆりてうまうれ
 せり

まのハまうりけりす同行僧長は曰けりハ本の花さくや折の折
 してて由士一折に各戸金を入る候まふちりハのみあうり大
 出見のみてせれりハ一なりまのハまうり又りやうりま
 ありハ一けりてけりけりおのりハとまもまもけりけりけり
 者すけりてけりけり

妙なり支山の麓藤子伯さゆりのちりやうりまも居り佛とをわ
 之を西道をも宗とすてけり人うりハけりすてけりけりけり

夢の如くありて夢を夢のこころにけりて八種又とていふまじ
する情しむぬすたけりていふまじおわきかゝるは夢を醒
悟すといふもいふこゝろにけりて一人のそとにたふらんや
竹の八式下りのまじりていふまじりていふまじりていふまじりて
らにけりていふまじりていふまじりていふまじりていふまじりて
あまかきいふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい

あまかきいふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい 常良

やうそ人里をふれぬはけりていふまじりていふまじりていふまじりてい
黒羽の鶴代浄切寺何りの方におつていふまじりていふまじりてい
は後心の如くうらうけりていふまじりていふまじりていふまじりてい
けりていふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい
けりていふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい

那波のよめをいふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい
情をいふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい
まへにちういふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい
いふまじりていふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい
快楽まじりていふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい

いふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい

當分やうまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい

いふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい

と松の葉にけりていふまじりていふまじりていふまじりてい
いふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい
いふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい
いふまじりていふまじりていふまじりていふまじりてい

玉子山に於てゆけしきよし言をたゞしむと松敷く乃く昔志
 一とて月有たたと松きく十景虎の本松を成て山田八
 きし如の松をいふくの後いふやと好の字よらのむれは石上は
 小茂岩窟と結ひけりな松松の死并はやいはゆの石をき
 尺くしよ

本場、く虎を破るうけ、五、本五

とる石（ぬ）一旬を植する、竹しうなる穀生石をゆく
 徳代よりするも、通るる大に付のものをと種冊をきとてく
 やきしきくても字を付くものこれ

神をも植りりりしむむけよ後いひ

穀生石を涅槃の物と云けしやめり石の毒害いふくむろひい
 神塔のたぐひま妙のま付足しぬにしかさあり死す又後

ともありては物ハ芦神の里よりく洞の畔に疎る此雲の歌
 菅戸歌其の時物尺きくやれしをりしこのことハゆかき
 ゆりて其後いふやと替ひしきとまは神のうけりては
 ようけりしれ

回一松、植するらさき松、うら子

心持多ふく松かをぬるやにきく川の岸にかりて松心き
 するぬわうし松をさるるものありしことし中をてて

屏ハ三園の一にして風語の人やをさしむ秋風を耳に疎し
 紅葉をを伴りて青葉の指代もれありゆのむかひむか
 景の花は咲きいてをさるるものありしことし中をてて
 衣裳をりてる人、下ぬく清柳のさるるものありしことし
 くのちをかきし屏のたくれはるれ 曾良

やうくしとくしゆにゆくすはしめさるる川をさすらういふるし命
 津松守くちら岩味古すをまのたふ下野の地をさうい
 と山はくたかけはるをさすゆににらふ穴曇て相取
 るつらす。川の禊と等好くまの致若て四五とめら
 丁先より川の岸にゆく。はるや。向長途の昔。いふ心
 け。九且ハ風空を魂うまれ松野。結を形てさく
 一一いひめくさす

風体はけしりやむく。田植番

春のよこしんをさすとも。かたハ松守三つむく一をい
 ぬがたのたさくはた大さる桑の本けをたのて五をい
 傳あり梅松ふさもかすや。むくおむらさきて物さ付
 けらるる酒

桑のよこしんをさすとも。かたハ松守三つむく一をい
 ぬがたのたさくはた大さる桑の本けをたのて五をい
 傳あり梅松ふさもかすや。むくおむらさきて物さ付
 けらるる酒

桑のよこしんをさすとも。かたハ松守三つむく一をい
 ぬがたのたさくはた大さる桑の本けをたのて五をい
 傳あり梅松ふさもかすや。むくおむらさきて物さ付
 けらるる酒

阿和(あわ)と(あ)を(あ)より(あ)とん(あ)とりの(あ)

川の(あ)國(あ)と(あ)と(あ)を(あ)して(あ)と(あ)の(あ)け(あ)の(あ)好(あ)の(あ)を(あ)る(あ)その(あ)山(あ)陰(あ)と(あ)十(あ)符(あ)の(あ)
 若(あ)し(あ)た(あ)と(あ)十(あ)符(あ)の(あ)若(あ)草(あ)を(あ)和(あ)と(あ)る(あ)と(あ)は(あ)す(あ)と(あ)る(あ)

意解

市川村の(あ)建(あ)球(あ)の(あ)

此(あ)の(あ)石(あ)少(あ)み(あ)は(あ)古(あ)と(あ)古(あ)尺(あ)略(あ)横(あ)三(あ)尺(あ)と(あ)り(あ)の(あ)若(あ)を(あ)穿(あ)て(あ)又(あ)字(あ)か
 す(あ)り(あ)ぬ(あ)四(あ)維(あ)國(あ)界(あ)の(あ)敷(あ)里(あ)を(あ)江(あ)と(あ)り(あ)此(あ)城(あ)神(あ)亀(あ)元(あ)年(あ)推(あ)察(あ)使(あ)統(あ)
 方(あ)府(あ)將(あ)軍(あ)大(あ)野(あ)約(あ)兵(あ)東(あ)人(あ)と(あ)所(あ)置(あ)也(あ)天(あ)平(あ)京(あ)字(あ)六(あ)年(あ)冬(あ)議(あ)
 東(あ)海(あ)在(あ)山(あ)岳(あ)後(あ)使(あ)統(あ)方(あ)府(あ)將(あ)軍(あ)直(あ)美(あ)約(あ)兵(あ)朝(あ)陽(あ)使(あ)造(あ)七(あ)
 二(あ)月(あ)一(あ)日(あ)と(あ)り(あ)之(あ)殿(あ)武(あ)皇(あ)在(あ)右(あ)の(あ)御(あ)射(あ)す(あ)也(あ)乃(あ)若(あ)し(あ)と(あ)り(あ)若(あ)し(あ)と(あ)り(あ)み(あ)あ(あ)け(あ)
 之(あ)後(あ)お(あ)わ(あ)か(あ)く(あ)た(あ)り(あ)傳(あ)ふ(あ)と(あ)り(あ)山(あ)崩(あ)れ(あ)門(あ)崩(あ)れ(あ)是(あ)ゆ(あ)ら(あ)ず(あ)と(あ)り(あ)
 取(あ)り(あ)埋(あ)め(あ)し(あ)去(あ)り(あ)か(あ)れ(あ)本(あ)を(あ)免(あ)れ(あ)わ(あ)り(あ)本(あ)を(あ)免(あ)れ(あ)は(あ)つ(あ)り(あ)代(あ)更(あ)
 一(あ)と(あ)り(あ)其(あ)後(あ)と(あ)り(あ)好(あ)ぬ(あ)の(あ)を(あ)と(あ)り(あ)に(あ)只(あ)し(あ)好(あ)ぬ(あ)ふ(あ)と(あ)り(あ)本(あ)

此(あ)か(あ)く(あ)み(あ)今(あ)眼(あ)前(あ)に(あ)古(あ)人(あ)の(あ)心(あ)を(あ)定(あ)め(あ)り(あ)形(あ)脚(あ)の(あ)一(あ)体(あ)存(あ)命(あ)の(あ)悦(あ)ひ(あ)
 若(あ)旅(あ)の(あ)勞(あ)を(あ)と(あ)り(あ)れ(あ)と(あ)り(あ)は(あ)く(あ)言(あ)ふ(あ)と(あ)り(あ)

それ(あ)と(あ)り(あ)世(あ)田(あ)の(あ)玉(あ)川(あ)仲(あ)の(あ)原(あ)を(あ)若(あ)ぬ(あ)末(あ)の(あ)松(あ)山(あ)を(あ)寺(あ)と(あ)造(あ)り(あ)

末(あ)松(あ)と(あ)り(あ)松(あ)の(あ)原(あ)と(あ)り(あ)れ(あ)と(あ)り(あ)ま(あ)す(あ)し(あ)と(あ)り(あ)て(あ)り(あ)枝(あ)と(あ)り(あ)つ(あ)り(あ)ぬ(あ)

其(あ)れ(あ)は(あ)末(あ)と(あ)り(あ)枝(あ)の(あ)は(あ)り(あ)の(あ)と(あ)り(あ)り(あ)て(あ)り(あ)し(あ)と(あ)り(あ)て(あ)り(あ)ら(あ)ず(あ)と(あ)り(あ)此(あ)

海(あ)に(あ)入(あ)り(あ)ぬ(あ)若(あ)を(あ)つ(あ)み(あ)み(あ)か(あ)れ(あ)ぬ(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)れ(あ)と(あ)り(あ)り(あ)有(あ)ね(あ)と(あ)

ら(あ)り(あ)海(あ)に(あ)入(あ)り(あ)ぬ(あ)と(あ)り(あ)は(あ)ら(あ)り(あ)と(あ)り(あ)の(あ)や(あ)り(あ)と(あ)り(あ)つ(あ)れ(あ)と(あ)り(あ)

こ(あ)の(あ)を(あ)り(あ)は(あ)ら(あ)り(あ)と(あ)り(あ)り(あ)と(あ)り(あ)け(あ)ん(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)れ(あ)と(あ)

若(あ)ぬ(あ)と(あ)り(あ)り(あ)を(あ)目(あ)音(あ)使(あ)使(あ)の(あ)形(あ)也(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)と(あ)

と(あ)り(あ)り(あ)の(あ)を(あ)か(あ)つ(あ)り(あ)と(あ)り(あ)も(あ)り(あ)り(あ)若(あ)ぬ(あ)と(あ)り(あ)り(あ)の(あ)あ(あ)り(あ)と(あ)

子(あ)ら(あ)り(あ)け(あ)り(あ)枕(あ)ち(あ)り(あ)り(あ)か(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)り(あ)

風(あ)と(あ)り(あ)れ(あ)ら(あ)る(あ)自(あ)の(あ)の(あ)味(あ)也(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)と(あ)り(あ)り(あ)の(あ)竹(あ)を(あ)

備内中。再無き。く。字。信。や。く。杉。椽。き。し。ひ。や。と。石。の。
賜。九。坂。子。言。う。新。り。所。け。の。五。う。銀。を。と。わ。り。う。新。り。是。由。来。
志。去。の。き。く。し。し。新。雲。の。こ。り。ま。し。も。う。う。く。さ。ま。の。風。
俗。あ。れ。い。し。号。を。終。新。あ。り。古。く。京。の。り。か。わ。の。ハ。ひ。る。の。
南。子。文。治。三。季。和。泉。三。郎。宗。遠。と。う。五。百。三。本。の。仲。今。日。の。
あ。り。う。う。い。さ。も。う。ら。ま。改。し。か。れ。ハ。勇。義。忠。孝。の。士。か。り。
值。着。ん。て。う。五。三。と。う。う。も。ま。し。し。人。う。く。そ。を。
信。り。久。義。を。ま。し。し。号。を。ま。し。し。これ。う。さ。ま。い。り。う。既。
子。牛。子。わ。り。舟。を。か。り。て。松。島。う。う。う。の。奥。百。二。里。船。將。
島。の。後。う。う。う。

と。り。と。ぬ。志。し。し。の。ぬ。ま。る。く。と。松。の。も。の。ハ。を。を。ゆ。い。さ。し。伏。も。
神。を。信。り。う。う。う。の。ハ。二。季。う。か。ま。う。三。季。う。た。り。み。さ。う。序。
う。う。れ。友。子。信。り。う。う。の。あ。り。抱。り。う。う。史。源。宗。と。う。う。と。松。
の。む。う。う。う。わ。う。枝。葉。の。風。を。吹。抜。め。う。屈。曲。の。つ。う。う。海。
い。う。う。う。一。女。舟。を。背。然。く。う。一。美。人。の。形。を。よ。う。う。浮。み。子。
と。や。う。う。神。の。お。り。大。山。す。ま。の。な。な。と。う。う。と。う。う。造。化。の。天。工。
う。う。う。の。人。と。な。り。と。う。う。う。い。の。を。を。ま。さん。

能。高。く。天。の。地。信。き。う。う。海。を。わ。り。う。う。會。居。福。砂。の。お。う。な。れ。
記。を。縁。石。を。か。り。う。う。松。の。木。を。け。り。き。し。し。い。う。人。を。お。れ。
ん。う。信。り。て。貴。族。松。と。う。う。う。わ。り。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。に。信。り。し。い。う。う。人。と。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。
う。

のちれハ北山ありありあふふ大河ハ衣川ハ舟出と珠をめぐ
りて了る智のつれ大河ハ麓入康御ホウ四法ハ衣ノ岸を隔る
南秋江をさしつりて美夷を防くといふことさても義はすく
き此城を託り功治一対の事あつたから國破れく山河は
城春うして草まきうりては笠打あつた時めつたうつる海を
さるしつらぬ

ままやほくものくもくさのゆと

うのちりてあふたゆの白毛りれ 曾良

かむし耳整しつら二ホを五帳す煙未も三将の像を飾り
尖ホりて三代の楯を納め三号の佛を安置す七言又あふを
く珠の尻風を破れ善の柱をまき朽く既り秋渡を左
の兼とれくあふ西面ゆつたかまみさ善をさるく風を

このく秋海まきの代念とあふり

まみしれお津 飾りてわ光 巻

まぬはそくしつら足やうく岩みの里を泊り小意答つたの小島
もさくあるこの島はう風おの岸よりうりて出羽あつたん
とす此法取人かれあつたふたれ九の岸をたゆや ぬくもてし
也しと岸をさる大山をのりて日既り昔けし八軒人のま
を足しけし今もさるもむき風おりれすす ぬく山岸の道
す

君ましつみされぬす 巻

ゆしゆのさこれふら出羽あつた大山を隔るはさきつらなふたれハ
そまの人のたのむことさるもさるもさるもさるもさるも
あのみゆれハ虎虎の足もの及船差を横る楫の杖を携て
あふさ先ささるりもさるも必危ふめりてゆりぬりあふれ

かゝる思ひを解く事なれば、心付くゆへに、
山素とて、一を、みちの、湖、まけ、あ、ひ、
く、と、お、師、は、ら、と、地、の、中、あ、と、け、
ま、と、若、手、職、人、の、つ、め、は、け、さ、ら、と、最、上、の、
か、の、葉、肉、を、一、ま、の、こ、の、こ、を、不、用、の、可、
ま、と、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
ま、と、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
ま、と、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

尾花、尾、尾、尾、尾、尾、尾、尾、尾、尾、尾、
志、志、志、志、志、志、志、志、志、志、志、
し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

酒樽を、使、う、る、紅、粉、の、花

禁、留、す、る、人、ハ、古、代、の、す、う、こ、れ、 曾、良

山、秋、領、り、立、石、さ、と、さ、し、ち、ち、何、う、意、受、大、少、の、一、基、り、し、殊、
法、開、の、地、さ、一、尺、す、く、ふ、り、人、の、み、す、あ、く、く、保、く、尾、花、は、
す、り、さ、く、く、一、千、百、七、里、と、さ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
か、く、く、く、く、山、の、米、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
柏、手、す、く、去、石、志、く、若、僧、若、字、の、院、く、鹿、を、買、く、物、の、
か、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、

走、り、う、る、や、若、り、き、く、入、様、の、お、お

と、と、の、川、を、た、か、ん、く、大、石、甲、と、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
古、く、佛、法、の、終、り、な、れ、と、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、

昔角一帯の地をわたりては是をさくら山とて新吉の
をよみかへしむるはしるも是をいへる人しるけしむる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とて

ゆつと川のみらけくまの山をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる
あつたき跡しむるはしるの地をさくら山とていへる

八の月廿二日 本條志久が引ひ空冠に改まつてみ
 強力と云ふものこそゆれぬやあふ山の中の水をこぼれ
 せりて八里更なる月行道のや穿入るやわしきれ
 息絶ふるえく頂上へ踏れはなほく月あつて世を
 渡りて松よりの山を待つやわしきれは山頂の
 岩のかくくりに鐘治の山をくまきりて山頂の
 了りに懸斎の剣をうらげり月山を踏まきりて
 去りて雲とくまきりて山の麓に剣を海とくまきりて
 芳とくまきりて山の麓に剣を海とくまきりて
 けりて山頂へゆきて三尺をくまきりて山の麓に
 けりて山頂へゆきて三尺をくまきりて山の麓に
 花のうらむるや 炎天の梅の花をくまきりて
 行号信

山の中へゆきて山頂へゆきて三尺をくまきりて山の麓に
 花のうらむるや 炎天の梅の花をくまきりて
 行号信

坊のうらむるや 炎天の梅の花をくまきりて

山頂へゆきて三尺をくまきりて

花のうらむるや 炎天の梅の花をくまきりて

行号信

山頂へゆきて三尺をくまきりて

花のうらむるや 炎天の梅の花をくまきりて

行号信

山頂へゆきて三尺をくまきりて

花のうらむるや 炎天の梅の花をくまきりて

是ふきと海へ入るるもみ川

に山水障の風光画を畫して家傳の方寸をたぬ海田の
晴より赤山の方山をくく破を傳ひてを踏く千餘十
里り氣胸をかしく清は風志砂も火上雨襟統い
多海の山かく關中上莫作と向く又かたりとを
傳の晴色まじ彩りてあまの管風を膝を入る雨の時
をもつにそお天よくをぬく砂をたれわつるさしわ
多海は舟をくく先融因とぬ舟をくく三寺遊店
の法を伝ひてわく舟をくく花の上く
と 橋の先木あり法ゆの記念を築すに上り伊陵あり
神功后宮の御堂をくく寺をくく満珠をくく之の寺を行幸
ありていふくくゆすいれくくや此寺の方丈の中

空層を捲ハ風系一眼の中をくく南の多海をくくさしえ其
かけくくしてはくくあむわくくの寺法をくく東に境
を築く秋田のくくはくく海北をくく浪あ入の
雲をくくはくく之の張横一理けくく休松高のくく
又くく松ハハあくく系法をくくわくく
さくく心もくく地勢魂をくくわくく

まきくくわ高く西麓、新ふの花
ゆ年や都行めれく海すく

象記

象記や神理何くみ津まのり 曾良

みくくみくく人

あ月のあやハ板をくくあくく名くくみ 佐耳

おさんやれかよのらおきんつて

山中の温泉にゆくはてしなくおん湯治千太郎とゆゆお左の
ら陽子親秀共ゆくの記山は空三十三所の明礼子さまより
存大慈大悲の傳を安置しおひてお告げもお付りやと
谷組の二宮をこうら傳しお告げもお付りやと古松橋あり
昔よりお水も岩の上より流るうけける珠珠のお水也

石山お石よりおらりー 秋の風

温泉の湯を母ゆきとてお決り

山中や菊の花をさくぬ湯のうらみ

あしとすもの今来り助しお告げもお付りやと
みはの負意もお告げもお付りやと秋の風
らとてお水も岩の上より流るうけける珠珠のお水也

一村お洞の料を清きくともお告げもお付りやと

曾良の夜を病むお告げもお付りやと秋の風

ゆきくともお告げもお付りやと秋の風

とてお水も岩の上より流るうけける珠珠のお水也

お告げもお付りやと

お告げもお付りやと

大聖寺の塚かお告げもお付りやと秋の風
のねばちりて

秋の風 おやうらみ

と秋の風を御子御子同しお告げもお付りやと
お告げもお付りやと秋の風を御子御子同し
お告げもお付りやと秋の風を御子御子同し
お告げもお付りやと秋の風を御子御子同し

停るも残照をうき階のありさすもわひまゝおそる庭中お
極られハ

池掃くもやや寺すらう 柳

去りぬき月 子守籠より手控の紙おの境吉崎の入に
も舟棹きして以越の松を尋ねぬ

ねむすのうらな 波もよこをきく

なをきくれもろ 以こーの松 西行

け一そくし風京書くも一辨をかすのひき用の推
をきくも

丸玉石新寺の長老古ふ因りれハ男ぬ又逢河の北枝を
もの徳神子尺送くけとまし志しひまの雲の風京さ
たすく之ひくけくおそゆれあはれ文外ゆゆと改

よりけり定み

柳 ちこ扇引さく 柳 波の丸

又十下山と入て小平ちを礼す是久保沙のゆ寺に邦操まほを
廻てかうふははを物しゆと貴ふふくともわ福井を

三里けうられハ飯志すてわくもはとぬのそもに
くに学哉いさ古くは士ありつねの年よりは今を成りて

あぬおすもあゆくしゆも先きふゆひてゆもや將おら
よや人さあおわれゆまに存命しゆもそもをいし市中心

そそり入てあやハ小窓よりお系瓜のくえりりく修治は
きくにたわくもはゆきしゆもらさくも門をくけは

けぬ女のおしゆもわくもそはゆ切くやゆハはゆ
ア何しとそよりのあゆぬ 用ゆハはゆとをわくも

ちうくしとてしるすやうし物さうとてう初つ風情は付れたとち
 しく君のゆひてをさう二ねとさううとて月八日さのみかたさう
 三とて我も何とてさうとて休をさうとてかひけてその枝打とて
 漸とてねたけかたをさうとて此の字ゆらうとてめをむの枝をさう
 玉のゆらふ枝をさうとてさうの算をさうとてゆらふ尾にさうとて
 八のゆらふ枝をさうとてさうの枝をさうとてさうの枝をさう
 初をさうとてさうの枝をさうとてさうの枝をさうとてさう
 やくしとてさうの枝をさうとてさうの枝をさうとてさう
 休すさうとてさうの枝をさうとてさうの枝をさうとてさう
 社政林をさうとてさうの枝をさうとてさうの枝をさうとてさう
 とてさうとてさうの枝をさうとてさうの枝をさうとてさう
 のさうとてさうの枝をさうとてさうの枝をさうとてさう

杉の所 古例をうり難く非あり古例をさうとてさうとて
 行の砂持くさけうとてさうのさうとてさうとて

十五日 寺まの御をさうとてさうとて
 月情 一 遊りのさうとてさうとて

名月 やわい 心とて和まてて人さうとて

十六日 定とてさうとて九八まをさうとて小貝のさうとてさうとて
 とてさうとて海上七里ありて大屋何集とてさうとてさうとて
 ころわうとてさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
 吹るぬ浪はさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
 尾を飲酒をさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

さうとてさうとてさうとてさうとてさうとて
 波のさうとてさうとてさうとてさうとてさうとて

千のたゆみの中しる我子事をもとくもくちを跡す海通々
けみかたのまじしむらゝいこみくむしはふ弱きにすけし
れく大酒のたぐ入ハ常良も侍あまうす本うめひ熱人をも
飛まこぬゆゑ常入集つお川子荆れ父子をふき一き人
人の旅訪ひく蘇せものうむさうしく且悦ひ且いこ
秘の物くさく等と告るす長月あまなれハ侍あはせ
きあへを又舟うけうて

蛤 ね

あつみみ子

くれゆく秋了

俳諧一葉集文々部

古学庵佛号

編

幻窓湖中

坎窩久藏 授

稿花並釋

菊の花を散らすさうてん竹の花を散らす牡丹を紅白の是花
頂くて言井ぬさけうさうお花をいふ地うさういふきううさう
花咲けいんれの花を花をいふ花をいふ花をいふ花をいふ花をいふ
極風去と置てうさうさうわがあひさん花林花をいふ花をいふ
花をいふ花をいふ花をいふ花をいふ花をいふ花をいふ花をいふ
人語く草花のたぐさうの友門人ともいふ花をいふ花をいふ花をいふ
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

みるはくのり御子のいとこを誠虎既に彼人すれは
 かれまゝつたの儘に地をへて物うちる人しゝものおを
 の風よからいれはとてよしとみおふてはらぬや筆お
 すまふま書物おえひつゝにあへたや。是ふ旅
 痛のむひにきり人へのまゝ此をを代の御使とていひぬ
 らひ一ひの強子三ひきの妻秋をさしゝるふひ。心巨道千
 流をそそくして一五月のあつは花らそわのめりひも
 さうろをさるこれ人しものちまうも物し。おかろふゆゑ
 どのういえとさうて古ふ屋ややをて三間ひ茅葺作とて
 一杖の柱にきよけ割れ竹の枝折戸やすうろや
 下粒あつゝ志うゝ。南々むひ池と壁と水樓とおす
 地は不二子おと案門事として地とあめまう。浙江は瀬

云すこの院よわい二月をへるたようよとつゝこれ八神月
 けろふらうをいひぬをさしてむ名肉のまをいひぬ
 て先世の直をいふ守る線作はててけりをおほさすられ
 或は半吹をれへ風鳥の尾をいへり。あ青扇破れて風
 そろい。すぬらして花吹とてあろさうひ差ゆゝとれと
 も谷まゆゝふひかの山井不材の敷本たつてしす村す
 傍懐素は是す年のをとて。あ張横深ハ新成のとな
 と御宗のちうふとさしてれうす世ふらつてととひら只
 べいけとぬひへ風雨のやちぬあふさあし

案門解 許字をさうし時の又し

去年の秋かりそあなうおをうしてりるをてて。五木の初め

鶴子とさみまうけのしゝらと捨をいももふり
雲のくろくろ月影のまももに風子いふく
い人のあきうるゆいふ

松の花のころも何よ木名の花
つき人は松子いふく木名の花

海とある一舟は決定すふと
かきみ二ふくならん

送信尊吟解

杖は千景籠をいけえまのうらよを
季やういのはい信尊は武江の本流川の
既于一歩をそとむと信尊の風流をよの市

越えまの斗薙り御の身もゆると
諸人としてあまのの朝子いふく
中のおきいふと予尊の父をいふと
うれいづるこもに岸上をいふと
かのいづるあまのの信子松花の喰
まのいづるあまのの信子松花の喰
よのいづるあまのの信子松花の喰

鶴の毛はくるよと花のや

既中賦

空月の跡無ふは止るよと月の子いふく

... 結ぶこと... 妙観...
 ... 又... 又... 又... 又...
 ... 又... 又... 又... 又...

... 係り... 係り... 係り... 係り...
 ... 係り... 係り... 係り... 係り...
 ... 係り... 係り... 係り... 係り...
 ... 係り... 係り... 係り... 係り...

閉關説

... 閉關説... 閉關説... 閉關説... 閉關説...
 ... 閉關説... 閉關説... 閉關説... 閉關説...
 ... 閉關説... 閉關説... 閉關説... 閉關説...
 ... 閉關説... 閉關説... 閉關説... 閉關説...

情をいふ事... 人生七十をゆく... 二十の年... 年六十の年... 是れは是非... 南無光地の只利害を極部... 人未れ... 予教... 友と...

友と... 禁戒...

約くもや堂を張おる午門の垣

何の好時集...

尾陽道... 柳様... 風情... 糸遊...

水のほとけはすくぬがとていへと後は一掬は百川の味を
まねてまきくし〜の杖の〜とていつかの清き白
川の秋風は〜の清き水の〜をぬ〜の〜の〜は
あ〜〜か〜は〜と〜と〜の〜はあ〜ら
お〜〜の〜の〜〜お〜〜の〜の〜は
三〜の〜のみ〜女守事ある〜人かは〜ら
よ〜の〜き

西の〜の杖の〜

善虫跋

その〜の〜物〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
一〜の〜の〜友〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

又字を〜の〜女守事〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
中〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
善人〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
物〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜
〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

身をこらえ是をまけに甘むしあはれなりけり
くもさし一程一帯を國をてあまのきさゆりし
むいあひいけいあまのきさゆりし

虚栗集跋

東山よま一葉其味如何

李杜の心酒をよみて其山は粥をすくことわづらひし

其句々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

徒ら風移のその昔々々々々々々々々々々々々々々

いかにぬ栗や

志の情々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

小島上陽人の室の中より名樹と昔のからたまし

下のあま備ふより親をいの娘娶姑のふけりて

砂のり寺の火気ある若菜の情をて松の白氏

後をさやつて心はわづらひし

其話震動あまをてまよふ言の鼎と句を煉て

泉と文字とて常は是花依のあまのけりて

好ぬきいそを待

閑居箴

砂の物々々の物々々々々々々々々々々々々々々々

もまはる人々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

月の夜々の何々の友のきさゆりし

ささげいし海のあまのきさゆりし

和しめけりてききとみかた又もききとみかた入るもてききとみかた
そとつめりけりてききとみかた

海のたはいしききとみかた

自得箴

ゆるふこころしききとみかたしききとみかたしききとみかた
けり

たしききとみかたしききとみかた

札銘

湖ありけりてききとみかたしききとみかたしききとみかた
湖ありけりてききとみかたしききとみかたしききとみかた

勢ありけりてききとみかたしききとみかたしききとみかた
勢ありけりてききとみかたしききとみかたしききとみかた

應葉ふ歌

えんは仲ききとみかた

唐右紙

人の紙をいふてけりてききとみかたしききとみかた

張白

ものいふハ唇ききとみかた 秋の紙

紙之銘

山素書

一 瓠重 鸞山 自嘆 梅 鷺 山
莫 懷 首 陽 餓 道 中 飯 穎 山

秋公のかたき居る生るかたきまのゆふの亀子つとふは
ゆへに多しゆいつのひまこまをたをみりつてけり
入る急ぎよき人なれはたふこのひまこまにさへん
つとてゆきをもふんばなれはたふこのひまこまにさへん
多院のひまこまの婦人つるゆきのものゆきもさへん
心ゆきもゆきのひまこまのひまこまのひまこま
きしむ女ごうきゆきのひまこまのひまこまのひまこま
しつるゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま
李向のゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま

きとくまのこころゆきも
きしむ女ごうきゆきのひまこまのひまこまのひまこま
物ゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま

梅七癖

こころゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま
お月さまのゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま
とちんちんゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま
難の慶心ゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま
をてくそつ枝杖一節命をちんちんゆきのひまこまのひまこま
ゆきのひまこまのひまこまのひまこまのひまこま

鄙言 自白

おもむきふらむのけさるも枯れ花のたゝるもさうなうら
むとさう我れはほくしあはれ人なほし人なほすれあはれ

奥哉人文

大和心長尾の里のいよあふまゆのりも初春よしのゆふにふ雪
—しとまゝはあまのいひし—あまのさなまろし老るる母のおく
—しとまゝはあまのいひし—あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく

—と春をゆきそよよとそよゆきれちつ—うらな—と春
もはゆきと古人とかうそよよとそよゆきれちつ—うらな—と春
もはゆきと古人とかうそよよとそよゆきれちつ—うらな—と春

吊初秋七日雨星文

元服又月吉の秋風や天子そら白浪浪河の岸をい
—と—鳥籠と栲杖をきく—一葉楓を吹折るき
二葉もを折る—と—あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく
あまのさなまろし老るる母のおく

言ふは子ほしを楓や岩の上

通明のしる

六七の年かきよはしつゝ結令嗣 松尾

雪竹賛

汝の素門雪竹之るは傍らやうんあふくのむしり可
ふくむけしつは沙を画てしるを汝さうもてせれく
東は六十手ゆきし予ハ既五十二ちのしり記書中
しつす言のかしらをゆふんは是そくくくはらわら
きもつてす

こらむけきききしんちのき

杵折賛

此杵のきききき名付ふのえ上つてしりききき
なば杖意のき物をかたはしつわのしりかしてゆふの甲
妙し柄のかかぬあをそむくハ楳植はらは花を
ゆし美人路し可具き名をぬがむらり人き
のしりしきききききききききききききき
原のしりしきの中ハ杖つちあへ

此はらぬむりし楳す杵の木を

平塚翁少河賛

ゆれりむきききききききききききききき
かきつてしりききききききききききききき
今こに現するききききききききききききき

あんなのうらやま
あんなのうらやま
あんなのうらやま

石心漫

停膝必相心の花
くさくさの洞の枯葉を吹て手あし
心くさくさの琴の音
くさくさの洞の音を吹て
くさくさの洞の音を吹て
くさくさの洞の音を吹て
くさくさの洞の音を吹て
くさくさの洞の音を吹て
くさくさの洞の音を吹て
くさくさの洞の音を吹て
くさくさの洞の音を吹て

西行上人贊

すくすくあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

後骨贊

あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

東順傳

老人素所ハ枝やうと
女祖父江州豊岡の豊士竹氏ト稱す
枝やうハそのハ番子ハ母方トす
その母ハ七十五歳ニ
ととの秋の月とやめ
枕のすゑあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ
あはれあはれあはれ

あつたかきりた店のはらうきし林こらぬの跡
さうしぬのむとかたみしと大空妙興の甚うくさぬ
一対驚き言ひし悔の産しとまの何甚の果よりう清秋
そんそと蒼鳥翫在の悲さくかきれくさ母存ないとい
て名前のなを破る杖を折て業をすつ跡うら十一年の
けりゆし本店をひ店すかてこののし心なきを放る
れをきくぬと十一年のうき年の上りし車とこほひ
ゆ上り生れて本郷の跡をとる是花大臣お市の人
る

入月の証ハ机 仕 四 陽 九

風景疎

金華を憐れりて散るもゆりきたる八士の志し又質物か
きりともし君子のいさゆしとすね合風景疎ハ我をも骨
わけて實とて筋り先難とるもりしゆすけし風景を
肺肝のうらみそけし心すたらあむしと十とをりか
九とをりわけ三とをりけりか骨を憐れと若何と先父の
後をきりしゆしとて先母を哀し程もをりけりしとて
いさむ母憐れりたすもきれとも景辱のうらみとけりしと
かきりしゆしとて手仲秋中の二言ゆ井釜のほの枕り
目をさすともと福倉工杖を成母ゆきとてゆ地もや
しゆしとて跡りしゆしとてゆ同き廿七の杉のこらと七
十年の母りきりやとら七葉の程るおのいをゆすゆきと
わくふ能ぬ五十年のゆきとらとてゆ公のおと後ゆきりゆ

すゝめは... 十の段... 十八樓...
此處... 目... 入... の... くれ...
一八

談念記

古ふ枕... 縁床... 聖... 物... 枕... 枕...
一八

不... 枕... 枕... 枕... 枕... 枕...
一八

お信庵記

石... 寺... 敷... 枕...
一八

かなん子丈う峰 橋くま山あり 是はの里をいしくろく
 敷くてゆーろちをうていふみけん 景景集の姿あり
 なる能守なるあうんいふくすのゆゑさひのほくたの
 棚つらう 行のあやををあて 橋の橋をけく名つくかの海
 棠り糸をいひさひのまほ 峰と度とむすく 二まの信任
 の境りあゆむく 只峰解の民とあうて 辰都すまとい 扱
 耶 太山千馬をいあうて 雲をいあうて けす免あつ時
 雲の信あをを扱くく けく 扱くく けく けく けく けく けく
 一徳のそあい けく けく けく けく けく けく けく けく けく
 信の けく
 よの物を けく
 此のす 畏心の信の けく けく けく けく けく けく けく けく けく けく

けく けく けく けく けく けく けく けく けく けく
 子も係て約 信虎の三書とわうて けく けく けく けく けく けく
 ありぬすて けく
 木音の けく
 けく けく けく けく けく けく けく けく けく けく
 とく 入本 けく
 けく けく けく けく けく けく けく けく けく けく
 勢の けく
 是非 けく
 けく けく けく けく けく けく けく けく けく けく
 一人 けく
 おも けく けく けく けく けく けく けく けく けく けく

雲の影を入る下をいふものもよふ風を身をこたぬ
つぼみを若くしてきてよく生身のとうろくしるは
昔能く才よりて此一すれつめる無天ハ縁の神を
あつた杉を夜より望更又燈のひかりをうらむ
けすけりふくちやおかかひがね
かひものむ杉の木もつゝ木立

西首お記

山を勢なりて性をやういふ水と神を信をかくさく教
觀二のうらやいふ位をてんがふり安田もかしこく
同は値段とてその風を吹く湯のそとさうがし
しつとふく海首お記の何ん戒備をいふていふの門也

り入るていつていふうまうかき際りまうまうのつりたれ
一書くとくつておのし直それ官よりて方夫おるもの二戸体治ニその
浅をつよきうそのうのりもいふ木を植石をかくかくむ
そふれもあつたそめくたの海と安田の燈をたぬの神のとく
一いをも抱えて上山をむといふ神を誰せのかしらつとつたれおの
ひき波をさうていふひのひひのさねをかくかくんてて青桐石
山を肩のゆりうらぬいおけて長きよの花をてつたかきて後
山を月をよそく流れ流れるのひにかくれつとて心直の風
をさうていふあつたれ

日方より花吹入る侍の情

成るよの庭上のねをばあつた詞

仕尾の里をけしけり 花ぞかき 諸人ゆきさひおほし 松の尾林
 の中ふそぢをききとてあつすて 上への喧嘩と三所ゆり
 ねとくしとあふんかめ仲母の 病とくる実とすし病と白の鶴と
 べゆりるうと侍れは志んくくこれとふしやきと三軒屋の陳
 藪の中はめり志しし様を植さうがこくそ縁結と縁結の
 上へ起すやとげり藪中の春春かふれり 服君村の柳正
 女房の花はわしをかかすひやう。

春のふそぢをききとてあつすて 上への喧嘩と三所ゆり
 ねとくしとあふんかめ仲母の 病とくる実とすし病と白の鶴と
 べゆりるうと侍れは志んくくこれとふしやきと三軒屋の陳
 藪の中はめり志しし様を植さうがこくそ縁結と縁結の
 上へ起すやとげり藪中の春春かふれり 服君村の柳正
 女房の花はわしをかかすひやう。

廿日如月... 相江... 春... 柳...

作のめし... 子... 竹... 杖... 杖... 杖...

首林... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖...

袖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖...

吉本... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖... 杖...

曉ちふかき野のうさぎの友ん此の世の所へは二重の故
屋を四重の人よりしりおひふとむとて又四重の世
持てしもの世にまわして災ひぬめぬ羽紅ん此京の海
を末程とす

廿一日昨夜の商うけは公たつて一守のけしきもあつて
似て新しうあつてしりあつておろけを致し候ふ所
そと及し末京の海にわたる人々もけしきもあつて
見ぬかゝり住居をたすけしり及ぬを致し候ふ所
に傍書す

廿二日朝の百兩海にわたる人々もけしきもあつて
遊小女詞
表す候ふもの世にまわして

海を飲みのハカリに致す

愁々住すもの先愁を致す

先無き住すもの世に居れしを致す

世に居れしもの世に居れしを致す

六里のうたの海をたすけしり及ぬを致し候ふ所

猶すも海に林よりわたる長崎屋士の田舎半りの園をた

すはまの世の世にまわして災ひぬめぬ羽紅ん此京の海
を末程とす

しき世をたすけしり及ぬを致し候ふ所

とて海寺の宿屋にいつりてそと京の海をたすけしり及ぬ
を致し候ふ所

手巾ぬ水々柄子子々位様一甚是の四代と云ふ家紋
毎子一

切子一 徳小瑞河心一 甚是れ子

又云

糸信と云ふ杖三丈と云ふ此一柄一本おきふるを
心へしと云ふ

こゝ柄 甚是れ子 甚是れ一と云ふ

罪 甚是れ子

物寄の甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子
か代やおきれ心子 物寄を境

廿三日

甚是れ子 八木魂子 甚是れ子 甚是れ子

文の取や木魂の物寄の甚是れ子

笋や 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

麦の穂や 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

一白く (麦の) 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

甚是れ子の甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

廿四日 題首柿令

巨極の 柿と木 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

廿五日 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子 甚是れ子

題首柿令

你對家峰伴鳥魚 就荒表似野人居

今中世の世に...

却りて徑小指河心へすまらる

又々

余何と云ふ杖三丈云々の此の杖一本おのまゝなるを
えいせき

この杖 葉をききぬる一さう

花をさす

物寄の葉をききぬる一さう
お代やおさくれ心より物寄をき

廿二日

まをたの木魂のつらさ月

文の歌や木魂のつらさ月

笋やおさくれ心より物寄をき

麦の穂やおさくれ心より物寄をき

一さう (麦の穂とおさくれ心より物寄をき)

歌のつらさ月

廿四日 題首林令

巨椋の柳の木をききぬる一さう 凡地

草の及ぶ木葉をききぬる一さう 諸所皆白く 諸息大伴の尚白

くす 諸息の凡地をききぬる一さう 喜伯凡地をききぬる

廿五日 亦那大伴の史邦丈草尺坊

題首林令

你對吟峰伴鳥魚 就荒森似野人居

枝既今欠赤帆印 青葉く既堪字書

石小智境

強撰惡情出深言 一輪秋月野村風

昔季儀は采吟韻 何處孤墳竹樹中

茅軒しよるニ茶うり葉の柳の家 文章

途中の吟

ほろりまけふくや 梅ささく

史邦

青山谷の感句

杜門覓句陳名已 對空林毫春夕游

乙州未りて武江の嘯并習ま分の船出に習女中

半俗の言肩入 入るふとら後

向井峠をさるるかこ記

貞角

鵜の篋をり ねんじり 月

野をり人子 小至ひん

字の山女子 ねんじり

りを免くゆき 思

中の刺さるる 雷煙電陣を我々をさる 対電陣

大さかしく柳のて ちいさくは葉のて

廿六々

茅軒しよるニ茶うり葉の柳の家 文章

くけの草子 けふふ角 文章

人々のわら 瓶のり 文章

乙州未りて武江の嘯并習ま分の船出に習女中 文章

向井峠をさるるかこ記 文章

廿七日 人本心 強ひて

廿八日 身より杜ふるをいひ新しき淨法にて是の心守れり
とて對心守るをいひ淨法にて火をゆめし陽物とてその水を言
ふるに此の妙をいひて心對心勝多をゆめし帯をいひたゆる
對心蛇を言ふこととて了騰枕にけり根安ふ莊園の隆官をい
はるにこれにて妙をつくまふ余實ハ聖人君子の言ふことあり
強ひて夢想を免れ心守る法を言ふ又志つるにこれにて心
守るにこれにて心守る念言あるに志深く侍臨由里にて
志つるにこれにて心守る法をいひて起しけり御の言ふことあり
百り、好しく氣のよく信ふに對して心守る法をいひてこれ
を對心守るに志つるに心守る法をいひてこれにて心守る
こととて心守る法をいひて

廿九日 日考して其妙を館の法をいひ

高館 鏡年 天皇 似 胃 衣川 通海 月如子

廿日 蜀人 世既の風氣 勉以ふ 叶古人 志を 遂げ 對心 守る 法

江州 平田の 照寺 李由 河の 尚ら 子那 子信 息

竹の子 やら しの 妙を けり のち 此の 妙

六丁 ちを 佩 忍 身 につく 卯 月 かな 尚白

是を 咬

ちを 九つ したる ちを ちを 一 筆 標

二日

曾良 其より 芳林 の 器を 易に 進歩 して 諸作 して 式に 田
友門 人の 妙を 承る ことと して 法を

志地はかきけつ入ハ友の海
大鳴やうしれたかくこちの果

夕陽をこらうて大井川上舟をこらうて
瀬をのぼる白海をこらうて
三々北風の雨降つてくると
とて河原改子板のり

同日 舟をこらうて大井川上舟をこらうて
柳合をこらうて

さみしおやを我にたふす
聖の法

修験大佛記

いふは不始はたれ天佛とて
高止人の四法ありて
ふらうささる命
まのたてかたを
一
基に柳子の坐
岩窟のあり
千々
言
を費し上人
高と修験

山

卯月の沖次次郎の浦一尺より一人の山を感ずるにけし月
いづれに結する事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず
るにけし月を感ずる事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず

ふれられぬ事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず

更科妹拾月一編

下 妹様の月一人の志きりありしに八月十五日の月を
之をきくは数すくれけれに秋に感ずる事なきかゝるにみよ
海の上にて秋を感ずる事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず
るにけし月を感ずる事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず
るにけし月を感ずる事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず

いづれに結する事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず

あはれおのりては月一人の志きりありしに八月十五日の月を
おのりては月一人の志きりありしに八月十五日の月を
いづれに結する事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず

義をわたりては月一人の志きりありしに八月十五日の月を
おのりては月一人の志きりありしに八月十五日の月を

芭蕉
古来

アハレそのうちゆきりハナシハナシ
其のけ結する事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず
北極を感ずる事なきかゝるにみよ海の上にて秋を感ず
あはれおのりては月一人の志きりありしに八月十五日の月を

田

まきやほくまのしん、ののめい、
松屋

田中一平あさくろくしほあはか度足引くしつりていれは
人そあけしひかのそを所管中北新久人そしあしわらう時こ
と人そいれはあつたのそをうそしあかえうしう友んおくしそ
られんしちのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
人のあはれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
の娘のあはれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
足しあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
たつたにたつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
五月廿二日、いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
かたつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを

いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは

いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれは

ち白虎賦

五十年やらのいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
みのあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを
いれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそをいれはあつたのそを

すきいさくらわんわんはなをいひはたきす

真体不書之教

蝶舞紙

この文のまじりたるものなり... (Main body of handwritten text on the right page)

五多れかのさるの柄の... (Main body of handwritten text on the left page)

松島紙

松島紙を... (Additional text or notes on the left page)

三十五

山嵐

つゆり抱ふありて深き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて
きよなる水にうつりて清き水にうつりて

老後岸の時 老後岸の時
まわりの木 枝はもみぢ風をよみ
まわりの木 枝はもみぢ風をよみ

月天賦

月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦
月天賦の月天賦

多ふて昔海に樂たつ詩もいひて支那のうつく木を
 夫れ訪月を物の之を來れりうつきゆれば多しう
 多しゆをれの中は燈懸は少く海に舟をりて多し
 むむもそそりてやちり風をさして三子若の志を
 さがれやまゝそそおの友とす人々味く洋くのこ
 さしをまじれはすして飲中八詠の歌いふらんや
 此は詩のうつくつらぬ友をいひてうつく月尺の
 やり思ひはすはそ夜の浮世のかれ風程を屋を
 米とすて友をさすていひは月を
 かて三子の舟をまゝとゆゆの舟をさすていひの
 この舟人の風情をさすていひて杖に歌書の夜をいひ
 とし船に茶瓶の若男ゆれは赤船の舟をさすていひ

何れは久しきやちやあやの霞の舟に柳の後の山を
 千一白のひり枝に梧川の秋に作らぬては言のうね
 きたるはくつる一りうて言羽の舟をさすていひの
 舟をさすていひの舟をさすていひの舟をさすていひ
 舟をさすていひの舟をさすていひの舟をさすていひ

舟自やゆの舟に七小町

されは香野の燈式に石山子深の舟をさすていひの
 居士の舟に舟の舟をさすていひの舟をさすていひ
 しての舟をさすていひの舟をさすていひの舟をさす
 たり舟をさすていひの舟をさすていひの舟をさす
 同の舟に舟をさすていひの舟をさすていひの舟を
 舟をさすていひの舟をさすていひの舟をさすていひ

さきづきの琳むくろ絶子の元をてた丁丁の舞のなつて
うたねきのハ人因の志のひまわらぬあや陶朱と舟
のそと五洲のゆあてあて一人ハ家々の新とく情の
子「越女の紅裙と花婿の翠衣をててに」あや
あやん行の言の移り佛とてふさしやう上戸の長と
山よりとめとてきりゆり藤とて及槐のなつて家
おととんものゆらひをまぬかすてと柳文とてあや行
にそと小杯のけかえぬと月言寺の入あて此あやれ
さしむとて



